

英 国 滞 在 記

中 村 永 司

大 学 生 活

英国の大学及び大学院の始期は、日本と異なつて十月一日に始まり、翌年の六月末に終了する。L. S. E (The London School of Economics and Political Science) の場合、一年間を三タームに分け、第一学期をミカエルマス・ターム(いかなるいわれがあつて聖人ミカエルの祭日をその名にあてたのかかわらないが、特に英国では四季文払日の一つで、当日はが鳥を食する習慣がある)と称し、十月一日に始まり十二月十一日に終る。二期はレント・ターム(キリスト教の行事の一つで、ざん悔の象徴として頭上に灰をかける習慣のある聖灰水曜日から、イースターイヴまでの四十六日間、断食や贖罪を行う期間とされている)と呼ばれ、一月七日から三月十四日までとされている。さらに三学期のサマータームは四月二十一日から六月二十七日までとされ、これで大学の一年間は終了する。

私が大学に所属したのは終期にあたるサマー・タームであり、ほとんどの講座が試験期に属していた。もちろんサマー・タームのみに開講される講義科目はわずかながらあつたが、この期はほとんどゼミで占められ、主要な講座はミカエルマスとレントの二学期に集

中していた。私が所属したのは社会科学及び社会管理部門であり、LSEには社会管理部門の外、十五の研究部門——会計学、人類学、政治学、経済史学、地理学、産業関係学、国際史学、国際関係学、語学、法律学、哲学、倫理学、社会心理学、社会学、統計及び数学——があり、主に社会科学系列の諸学問のほとんどを網羅している。各部門は独自の研究体制、試験制度、多様な研究コースを敷き、各自固有の方法で運用されている。学生数千五百人、その内、海外留学者が五十四パーセントを占め、その国際色性は他に類をみない。私の身分はリサーチチャーとして登録され、社会管理部門に五名の者が在籍している。この部門での研究領域は社会管理及びソーシャルワークを始め保健サービス、住宅政策、対人ソーシャルサービス、社会保障、教育、社会政策などが主であり、ソーシャルサービスに関する多面的な視野をもつ人材の養成に努めている。教員構成は教授三者、主任講師、講師及びミスター、ミスと呼ばれる教員を含めて二十五名である。リサーチチャーには原則として一人のスーパバイザーが当てられ、チュートリアルシステムによる個人指導を受けることになっている。私の最初の

スーパーパーは、レモンと呼ばれる四十歳がらみの女性博士号獲得者である。彼女はイスラエルの出身で学士及び修士号をヘブライ大学及びイラン大学で受け、博士号はバーミンガム大学で獲得した経歴の持ち主である。彼女はサイキアトリックソーシャルワークを専攻し、学内ではゼミとフィールドワークを担当しており、なにかと要求がましい性格の人であった。彼女が私に課した最初の課題は *Social work face to face* という分厚い単行本を一週間で読み、まとめてくるようにといった苛酷なものであった。英国生活も始まったばかりの不安定な状況下で、その一週間は辛い不眠不休の連日であった。彼女が課した二番目の宿題は、ロンドン特別区ユズリントンでのソーシャルサービス部と身障、精薄、老人、児童、非行などの機関、施設訪問に関するレポートの提出であった。この時は二週間の期間を定め、見学しまとめてくるように要求され、血のにじむ思いでやりとげた苦しい経験を思い起す。

LSEでは海外からの研究者に対して、特設の語学研修が開催され、典型的な英国紳士であるミスターチャップマンが、ケンブリッヂ大学訛の難解な言い回しで解説する英語教

育には、独特の内容を含み、時に日本的趣味を披歴され、盆栽や禅などが飛び出し、その対応にずい分苦心した。また同時にランゲツジセクターからLJ指導を受け、カセットを耳から聞く味けない訓練を強要され、窓越しにみる見馴れない尖塔にわたる雲をながめては郷愁にかられたものであった。授業時間は六十分間で午前、午後とも一時間か二時間程度の時間割なので、学生にとって自由時間が多く、そのためフィールドスタディーを活発化するように要求されている。受講者数も



L. S. E.の正面玄関にて

日本のそれと変らず小グループのもあれば、森島教授のように知名度の高い人になると、LSEにある劇場を使用して五、六百人を数えるものもある。ゼミはほとんどが十人未満で、学生は事前に問題を出され、レポートにまとめて発表し、充分な時間をかけて討議される。佛大にお馴染みのピアシヨウ氏とワディン氏の共同講義とゼミは、若くユーモラスな人当りが学生に受け、特にピアシヨウ氏は、授業の始めに大きな声で「お早ようございます」と私に日本語で声をかけてくれ、他の学生の手前もあり、私はずい分自分の頬を赤らめたものでした。ゼミでの討論は学生同志はもちろんのこと、チューターも激しくたたかわせ、時には学生がゆずらず白熱することもあった。けれども昼休みやティータイムともなれば、ともども飲食しながら談笑する様は、チューターとの隔たりのない和やいだ交歓風景がみられます。

私がLSEで最も驚いたことは、食堂に併設されたバーがあることで、大学施設内に飲み屋があるなど、今までの私の経験から全く考えられないことであった。赤光りのするマホーガニ製のカウンターの奥で、純白のチュニックを着た初老のバーマンが、まじめく

さった手さばきで学生に応じる様は、見馴れない私にとって驚異に価するものであった。バーのオープン時間は市中のバブと同じ午前

十一時から三時までであるが、その間はさしも広いフロアも教職員と学生で埋まり、そこからあふれた人達は、それぞれグラスを手にして、バーの横手から出入りできる屋上に出て、テーブルを囲んで気炎を上げる。屋上は花壇で彩られ、色とりどりのビーチパラソルが設営され、そこだけはいつも華やいだ雰囲気をかもし出している。ある英国駐在の商社マンが少々誇張ぎみに言っていた「英国では商談は午前中のバブオープン前にしろ、午後は仕事にならない」といわれるほど英国人の酒好きは聞きしに勝るものがある。

大学での自由時間のほとんどは、多くの学生がするように図書館で過ごすわけであるが、図書館への入館はまず所持品とコートを、紳士風の身なりをしたクロックマンに預け、身分証明書をあの悪評高いチェックボードにさし込み、スチール製の棒がぐるりと回るといって、伝統的に羊の頭数を数える装置をそのまま使用したものを回し入館する。ソーシャルアドミニストレーションとソーシャルワークの蔵書は、広大な建物の四階にありその蔵書

の数はソーシャルワークの関係書籍だけで一万冊に及び、目次を追うだけで数十日を要すると言われる。

本の匂いとページをめくる音、時折りする咳払いの声しか聞えない静かな図書館の雰囲気は私の心を緊張させかつ魅了させた。LSEでは学生が読むべき著書のリーディングリストを配布し、ソーシャルワークコースだけでおよそ千冊、リストアップされている。英国では本の価格は非常に高く、そのため学生は必要なものを限定して買い求め、あとは図書館を利用する。学生に図書館通いの習慣のついたのはこのためであろうと思われる。

下宿生活

私の下宿は古い数あるロンドンの地下鉄の中で、比較的新しく布設されたジュヴィルラインをキルヴァーンで下車し、十分ほどゆるやかな丘を登りつめたところにある。下宿のあるあたりはおよそ百年ほど前、公務員用住宅地として開発されたところで、一様に規格されたレンガ造りの建物が並ぶ閑静な場所である。ロンドン到着当時、不安な気持を抱いて下宿の門をくぐり、ランドロードに迎えられ、これが一年間の私の住処になるのかと思

った時の感慨は今も忘れない。ヒースロー空港でのイミグレーションの手続や荷物の授受の際の手違いによる戸迷い後、手さげ袋二ヶをかかえ、大きなスーツケースをころがしながら、地下鉄をさがし、インホームーションカウンターで教えられた下宿のある場所を、占う思いで捜しあてた直後の下宿での、最初の温いティーのもてなしは、私の心をずい分慰めてくれたものでした。

下宿のロードとレディはポールランド系ユダヤ人で、第二次大戦下ナチに追われ、ソ連からアフリカへ逃走、その後英国に渡って永住権を獲得した。大戦下では辛酸をなめ、その間父母をなくしたと聞く。苛酷な運命にありながら夫婦とも温和で、心から歓迎してくれ、遠路の旅の疲れをいたわってくれた。使用されていない暖炉の上に、民族衣装のよく似合った美しい女性の写真があった。それはランドレディの娘時代の写真であるという。私が手にとって再三見比べるげんそうな私の目差しに、少々心情を害された感じを身に受け、早々に彼らの居間から退散することにした。

私の部屋は南面の陽の差し入る温い位置にあり、窓を開けると五百坪ほどある裏庭の花

木や隣接した他家の菜園がみわたされる。裏

庭には二本のリンゴの木と一本の桜の木があり、他は足の踏み場のないほど、いわゆる日本で言う高山植物が百花繚乱として咲き誇っている。桜の花は十日間近くも満開のままであり、散ることなく枝に附着したまま枯れてしまう。あじさいの花は四月に咲き始め、十一月頃まで咲きつづけ、後はドライフラワーとなって冬を越す。いささかしたたかで執念深い英国人気質を思わせる花の様である。部屋には各室とも温水によるパネルヒーティングが配置され、真夏でも暖房がきいている。熱源はほとんど電気であるが、英国では電氣代やガス代は日本に比べて非常に安い。ただ困ったことは、入浴用の湯が電氣によって、加熱され、その上温水を貯めるタンクが狭小のため、広い湯舟に湯を全部はって横になっても、せいぜい下半身が湯の中につかる程度で腹部、胸のあたりは完全に出る始末である。誰かが入浴した後、タンクの冷水が温まるには四、五時間要し、日本のように何人もが集中して入れない。入浴一つを例にとってもこのような状況であり、生活の合理化は日本の方がはるかに進んでおり、彼らの生活のリズムは百年も前から変わらないのではないか

と思われる。

下宿の一日は八時半の朝食から始まる。英国人の朝食は大陸式のコーヒーとパンだけの食事比べて豪華であると言われる。いわゆる馬の飼料だと言われたポリッツ、すなわち冷たい牛乳と砂糖をかけて食べるオートミルの粥の類に始まり、果物、ベーコンエッグとソーセージあるいはニシンの燻製、紅茶、パン、時折コーンフレークなどが出される。まだ胃袋が覚醒していない時期に、これらの食物を全部摂取するとなると至難の技である。しばしばランドレディーの目をかすめて、ベーコンやソーセージを紙ナフキンにつつんで自室に持ち帰ったものである。これらの品々は後でまとめて焼めしの具に供せられる。この下宿には下宿人用の台所があつてずい分助かった。留学生の中にはしばしばノイローゼに悩まされるものもある。その原因は食生活の相違にあるといわれているが、確かに英国人の食生活は「単なるカロリーの補給作業として考えない」ほどに味けない。私の英国滞在生活中を病氣もせず、快適なものにさせたのも、どうもこの台所に負うところが多分にあつたと思われる。油っこい朝食になやまされ、学食や食堂食のまずさにこり、日本レストラ

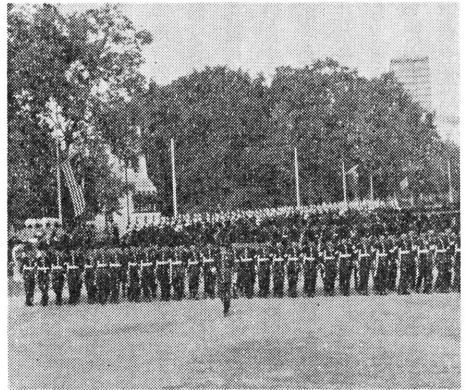
ンの巻き寿司、一本千五百円に腹を立てた私の情緒を平穩ならしめたのは、この台所の存在であつた。かくしてこの下宿に漬物石が並び、味噌しるの臭いがただよい、日本食を下宿のオジさんオバさんに供応したのは私が初めてであつたとか。

ランドレディーはしばしば食事やティーに招待してくれた。その場所は彼らの食堂であつたり裏庭であつたりする。快適な夏はその生活のほとんどが裏庭をめぐつてなされ、テニブルやデッキチェアを持ち出して、ひねもす談笑にふける。「裏庭こそが英国式マイホーム主義者の人生の表舞台」であるといわれるように、内と外を明確に区別し、プライベートルな生活を重要視する英国人にとって、彼ら独得のヒマ潰術を、塀で仕切られ、隣人とも没交渉の空間で花や芝生いじりをして過ごす。英国人の裏庭はこの家庭も広く、よく手入れされ、各種の花木が植えられている。なかでも五月から七月にかけての石楠花の開花期は息をのむほど美しい。夏の朝まだきにナイチンゲールの鳴声に目醒め、暮れなずむ午後九時頃まで、小鳥のさえずりと花の香に満された裏庭の一日は、日本では考えられないような、ゆとりと人生のなんたるかを教え

てくれるような、新鮮な市民生活のエキスがこめられている。ランドレディが裏庭で供す紅茶には、このような小市民の平穩で安泰な生活の願いが混入されている。

市民の憩い

ロンドンは公園の中にある街である。公園は街の随所にあつて、市民の生活の場であり、その延長でもある。豊富な樹木と手入れの行き届いた芝生には、無数の鳩や水鳥が戯れ、あの過敏な雀でさえ、人の掌に飛んできて餌をついばむ。春から秋にかけて公園は花で埋まり、仮設のデッキチェアやベンチでは、日光浴を楽しむ人達で賑う。恋人や老人仲間、老人と孫が一日中動物と戯れたり、ボートを漕いだり、ボール遊びに興じている。ロンドンの公園でなによりうれしいのは、緑したたる芝生に自由に入り、腰をおろし、あるいは寝そべって道いく人をながめ、物思いにふけることができることである。英国人にとって芝生は眺めるためのものではなく、利用するためのものである。夏期は名だたる公園で、昼休みと夕方、野外音楽会が催され、クラシックからポップミュージック



女王誕生記念パレード

にいたる各種の曲が演奏される。市民はまさしく身体全体で、きらめく夏を謳歌し、吸収している風である。

英国人の知的旺盛さというべきか、好奇心の強さと称すべきかその欲求を満すものとして、ロンドンには非常に多くの博物館や美術館がある。名の通ったもので博物館が十三、美術館四を数え、市民の知識と教育の殿堂になっている。大英博物館から玩具博物館におよぶ各種の博物館は、連日無休、無料で公開され、特に児童や大学生にとって学外授業の

必要性から学校施設の一部として使用されている。

また市民生活にとって、欠くべからざるものはパブリックバーの存在である。ロンドンだけで五千軒、行く先々でパブにぶつかると言われるほど随所にある。「ビールは英国人の主食」であると揶揄されるほど、彼らはよく飲む。アルコール飲料で国民一人当りの年間消費量（一九七五年）はビール百八リットル、ウイスキー四リットル、ワイン六リットルで、圧倒的にビールの消費量は多く、その九割がパブで飲まれる。

パブは工業化のもたらした都市の社会問題の凝集点であると言われ、特に十八世紀の後半では怠惰・浪費・泥酔の温床とされ、しばしば暗黒の世界とも結びついていった。当時の英国は産業革命華やかなりし時代であり、産業の近代化と大規模化の急速な進展の過程で、手工業を中心とした自己のテリトリーで細々と仕事をしていた労働者は、塵埃と騒音に満ちた工場に狩り出され、あるいは暗い憂うつな炭鉱にもぐらされ、長時間の苛酷な労働に耐えねばならなかった。多くの婦人や子供までが工場へ追い立てられ、家族関係は分

断され、犯罪、早老、早死、極貧、疾病といった惨たんなる社会生活問題を蓄積させていた時期である。このような悲惨な生活をまぎらわし、逃れるために庶民はアルコール類を常飲したと伝えられる。当時ホップが高価であったため、もっぱらジンがよく飲まれ、「メシを食うカネがないので、メシを食うかわりにジンを飲んだ」と言われるほどジンをあおった。男も女もよく飲み、はては腹をすかして泣く子供にジンを飲ませ、母乳が出ないからといって赤ん坊にまでジンを飲ませた。極貧の労働者のひしめくスラム街にあっては、パブの開店を待ちわびてカップを手にした子供達が、大人に混って並ぶ姿がみられたとも言われる。そのために老いも若きもおびたしい数のアルコール中毒患者が、社会の底辺にたむろい続けた。

かくて一九一五年酒類の販売に時間制限を設ける法律が制定され、パブの営業時間も厳格に規定されたのである。パブの開店時間は今日でも午前十一時から三時までと、午後五時から十一時までとされたばかりでなく、酒類販売店も酒類の商いをその時間内に限定して、時間外では売ってくれない。

パブのこのような暗いイメージと異なっ

て、もっと積極的、肯定的な評価がある。それはパブの機能であるが、パブは地域の集会場としての役割をその当初から果していることである。すなわち労働組合や政党の集会もパブでなされ、マルクスとエンゲルスが「共産党宣言」を練ったのも、この場所である。あるいはまたチャーチスト運動家のたまり場になり、時には宗教家の説教の場さえなったのである。

現代でもパブは地域社会の隣人達の社交の場であり、情報の交換の場所でもある。仕事を終えたサラリーマンが帰りがけにちよいとひっかける都心のパブと異なって、ローカルパブは緊密な地域社会のネットワークの一翼を荷っている。地域社会の仲間作りとその紐帯を強め、酒を飲みながら、隣人の噂話や馬や犬のレースの話、はては政治経済の高等な話題もかわされるのである。パブはティーパーティーと同様、英国人の生活に欠かすことのできない公共の社交機関のようなものである。私もかなりの数のパブめぐり、いわゆるパブクローを試み二、三の馴みを得たが、概してアイルランド系の人々が出入りするパブは人づきあいがよい。

失業・不況・ストライキ

昨年 MORI という調査機関が行った世論調査では、政府が直ちに着手すべき課題として、第一に失業対策七パーセント、第二にインフレーション対策五六パーセントという結果であった。この二つの社会経済的問題が現在の英国の素顔である。失業者数は季節調整後の数字で昨年七月百六十万人（失業率六・六パーセント）を越え、その二ヶ月後の九月、二百万人（失業率八・八パーセント）の大台に乗り、年末には三百万人もの失業者が予想されるという勢いであった。

一方、インフレーションも昨年五月、前年同月比で二十一パーセントを記録している。英国は一九三〇年来といわれる不況を経験している。鉄の女サッチャー女史は、金融引き締めや公共支出削減をキャッチフレーズにして、英国病の荒治療に乗り出したものの、具体的にどこから手をつけてよいか、ふり上げた拳を下すところがないといった所存である。それでもまず予算の緊縮政策を打ち出し、公共支出の削減と福祉政策の見直し、通貨供給の抑制といったところから着手したが、その結果公共支出部門から最も泣き所の国防費まで削減の対象としなければならない羽目に陥っ

た。しかしこの財政支出の緊縮でもっとも手痛い打撃を蒙ったのは公務員で、中央政府の公務員五万人の首切りを勧告し、保守党が政権を獲得した一九七九年五月以降、約半年経った十二月に二万人の削減を断行している。

その余波は地方自治体の公務員におよび、さらには教員の二万一千人の整理が組上になっている。福祉サービス費の抑制と社会保障給付額の引き上げ停止、無料で聞えたナショナルヘルスサービスの処方箋や薬剤費の一部負担が実施され、それに追い打ちをかけるように酒税、タバコ消費税、ガソリン税などが上がり、国民の政府支持率は急落している。

私が留学した昨年五月、英国のかの有名なストライキに遭遇した。TUC（英国労働組合会議）が反保守党経済政策をスローガンに、国鉄、地下鉄、バス、タクシートの労働者を総動員しての政治ゼネストであった。結果的には失敗に終わったのであるが、このような大規模なストは別にしても、英国では労働者のストライキは年中行事の一つである。市民の対話にも、お天気の挨拶の次に出てくるのがストの情報交換である。

英国の労働組合の力の強さは定評があるが、近年の労働運動を特徴づけるものは、政

治的無関心による政治的活動の後退とそれにとってかわる経済的要求の実現のための行動であるといわれる。すなわち家庭の生活向上を至上とし、わが国でも指摘されているようにマイホーム主義化への動きである。それに加えて今まで一枚岩で結ばれていた労働党政府に対しても、抑制、攻撃の手をゆるめず、そのために労働党政権がいかなる影響を受けようとも関知しないという態度がみられる。

ともあれ組合活動の自由は、私の考えている以上に膨大で、スト中の労働者には手当が支給され、スト手当がない場合には、無収入状態を保障するために相当な額の所得税の払い戻しがある。またストに参加している労働者の家族には、社会保障による補足給付が支給される。ところで多発する労働者のストライキ攻勢に対する市民の反応はいえ、意外に冷静で、ヒステリックな動きはみられない。自分の都合だけでストに極端な態度をとる人は、英国にはほとんど認められないし、あまりにも寛容である。しかし七十九年の冬の電気やガス会社、病院職員のストには、この寛大なる英国民もほととまいっただしく、それを語りつぐ表情に苦悩がにじみ出ていた。

学会

ケンブリッジのガルトンスクールで開催された社会政策学会、英国ソーシャルワーカー協会の主催する児童収容施設ソーシャルワーカーの研修会、スコットランドのさい果ての都、アバディーンで開かれた老年学会、そして地元ロンドンでは児童貧困化防止協会の大いに参加した。総じてどの学会も日本のように分きざみの発表形式をとらず、グループディスカッションを中心に半日あるいは一日、たっぷり時間をかけて討議される。大抵昼食をはさんで午前を問題提起に当てられ、午後グループに分れて提起された問題を深めていく。その間モーニングティーとアフタヌーンティーの時間がとられ、ティーとケーキ、あるいはアルコール類まで供せられる。どこかサロン風で親睦会のような雰囲気がある。

英国の大学のほとんどは寮制をしいており、夏休みに入るや学生達は原則として、身の回り品を整理して大学関係者に部屋をあけ渡さなければならない。学生の夏休み期間中、大学で開かれる学会や大会は宿泊用として学生からあけ渡された寮を使用し、会場もキャンパス内にある建物を利用する。夏休み以外に開催された老年学会や施設ワーカーの

心によせ、情報収集と交換の約束をする。

ガルトンスクールの礼儀正しいバイト学生の給事による豪華なダイニングホールでの正餐の後、総会がもたれ議長長のユーモラスな司

会のもと、和やかな雰囲気の中に議事が進められ、拍手をもって第一日目の公式の会は終了する。その後、各自は構内のバーで酒をかわす。次期会長であるロンドン政策研究所のマツチルダ女史からビールをふるまわれ、未熟ながら限りある単語を駆使して親善に努める。

二日目の午前はヨーク大学のキャサリン・ジョーンズ教授により、発題講演がなされ、一九四五年以降英国の社会政策と行政制度の発展的評価と題して、およそ一時間講演された。午前のコーヒープレイク後、午後一時まで五グループ——所得維持、地域社会開発、ソーシャルワーク、住宅、社会運動——に分れて討議がなされた。昼食後は所得維持グループを残して、公共支出グループ、保健グループが新設され、さらにアフターヌーンティール後、これに少年非行グループが加わってデイスカッションが展開される。夕食後黄昏のクリケットゲームが開催され、参加をさそわれたが、ゲームの方法やカウントの取り方が

三日目は二日目と同様午前の一時間は、戦後ヨーロッパの社会政策の比較考究に関する講演に始まり、講演終了後一時までグループディスカッションが継続された。二日目の保健グループを残して、法的サービス、雇用政策、教育の三つのグループが新設されて討議がなされた。参加者は各々のグループのいずれに参加してよく、関心のおもむくグループに所属し、原則として中座は憚かられる。午後散会。

昨年のちょうど今頃、薦のからまるガルトンスクールでの英国政策学会は、息のつまるようなハードなスケジュールと緻密に計画された内容であつたが、言葉の限界を越えて異邦人に対する配慮と、やさしさのあふれた学会であつたことがなつかしく思い出される。

えいし 社会学部助教授)